

平成版『当世書生氣質』——何が彼らをそうさせているのか？

“Contemporary Students’ Way” : A Heisei - Version

—— Things behind their behavior ——

青木利夫

Toshio Aoki

1. はじめに 孫子の兵法にしたがえば、「敵ヲ知り、己ヲ知ラバ、百戦危ウカラズ」である。裏返していえば、敵を知らずに戦いに臨むほど危いことはなく、結果は惨敗にちがいない。もし大学での授業を、教師VS学生の教育戦争、つまり教育したがつている先生とそこから逃がれようとしている若者との戦いとみるならば、敵すなわち学生たちを知ることが教員の必須の前提であるはずだ。ところが、この前提がはなはだ怪しい。眼前の学生が何者であり、何を考え、何をしているのか、老教員はほとんど知らず、また知ることもできず、ただ「近ごろの若い者は……」とぼやいている。この深いギャップこそ、いまの大学の最大の問題のひとつではあるまいか。

と、えらそうに言うが、ほくも大学の教壇に立ってまだ十年たらずの、高齢な新米にすぎない。専任の本学のほか、いくつかの国私立大学で非常勤をした。入試委員などを少しつとめたほか、バレーボール部の顧問もやっている。この程度の経験が普遍妥当性をもつはずはない。にもかかわらず、あらためて当世書生氣質（坪内逍遙）を考えてみようと思立ったのは、教員としてアイデンティティー、つまり自分は何のために教壇に立ち、どんな存在理由をもっているか、に深く関わっているからだ。

2. 社会を映す鏡としての大学 今更いうまでもないことだが、ほく自身が学んでいた五十年前とくらべて一番かわったのは学生にとっての大学の位置あるいは役どころだろう。あのころも戦後の貧乏生活でそれぞれにアルバイトはしていた。競馬場、家庭教師、いろいろあった。しかし「学生ノ本分ハ勉強ニアリ」という明治以来の常識までは揺らいでいなかった。それは現在でも変わっていない——のか、どうか。

いま単身赴任中の学生たちの多くは、故郷の父母から毎月4万ないし13万円くらいの送金をもたらしている。なんという涙ぐましい親の恩ノだろう。けれども一カ月の生計には15万円以上かかる者が少なくない。その内訳は、部屋代、食費、書物、雑誌代、衣服代などのほか、社交費（飲み代、コンパ費など）がばかにならない。ここが昔と大いに違う。そのためにも、かれらはアルバイトに精を出さねばならぬ。詳細は別掲の川上・小林論文、中西論文にゆずるが当然、教室への出席時間は大幅に減少せざるをえない。

加えて就職活動という新しい要素が割りこみ、ありがたいことに日経連が入社試験の規制緩和に尽力してくださったおかげで、それが年々肥大し、いまや四年生はほとんど大学に出て来られない。あるいは出てくる必要も義務もなくなりつつある。大学側は就職課が必死の努力をやってきているものの、教員のほとんどは何の役にも立てない。つまり教員不在というべき一年間に、学生たちは自分の将来をかけて東奔西走しているかたちだ。

しかし、こういう大学生活の物理的変化より、もっと重要なのは授業内容の問題だろう。簡単にいえば、ワカンナイ、ツマンナイと学生が公言し、その対策として全国の大学がカリキュラム改革から学部改名まで右往左往でそのごきげんを取りむすぶことに追われている現状だ。ぼく自身をかえりみても、自分の授業が完全だなどとはクチが裂けてもいえない。カリキュラムや講義を自己点検することはもちろん賛成する。その際、1コマ1時間半という授業時間も、テレビ番組の長さに合わせて50分ていどに短縮する試みがあってもいい。ぼくらの学生時代、1コマ2時間だったが、実際はアカデミック・クォーター（大学の15分間）と称して、教師は15分おくれて登壇し、15分はやく引きあげたものだ。今の学生たちは始業時刻にキチンとそろっており、こちら時間もいっぱい話す。それでも、ぼくの授業は幸いほとんど私語がない。ならば、何とかワカる授業をせねばと責任感にかられるのだ。

けれど、ワカンナイ、ツマンナイは、明治以来の日本の大学のかがかやかしい伝統だった。それでも深く感銘する授業がたまにはあって、ぼくたちは動物的なカンでこれを発見し、それに満足して大学の門を出てきた。考えてみれば、標準以上にアタマのいい人たちが勉強に明け暮れたすえ教授の職に到達し、その研究の一端を教室で開陳するのだ。ポツと出の平凡な学生とはもともと能力・意欲・目標の点で大きなミゾがあり、ワカンナイ、ツマンナイと思われるのは止むをえない宿命といってもいい。とすれば、なぜ、そういう学生の声が全国から噴き出て、大学や教員を圧倒するにいたったのだろうか。

乱暴に言えば、学生たちにも問題があり、そういう学生を育てた小・中・高校教育、それをねじ曲げた受験戦争の責任を問わねばならない。たとえば高校時代に世界史を学んでおらず、フランス革命やアメリカ独立も知らない若者たちが、いきなり大学で国際関係の講義にぶつかるとき、ワカンナイ、ツマンナイと叫び、教室で私語に熱中したり、眠ったり、さぼってアルバイトに走るのは当然といってもいい。もちろん、かれらを非難し、サジを投げるのは簡単なことだ。げんにそういう対応が全国の大学でみられる。繰り返えすが、大学側が十分に職務をはたしていると強弁する勇氣はぼくだって持ち合わせない。それでも、積年の制度的欠陥がもたらした現状はまことにサンタンたるものである。あるひとはいう。「昔とはちがう。いまの学生は一握りのエリートどころか、ほとんど義務教育的な大衆なのだ。大学はそのつもりで対応すべきだ」と。もちろん、ぼくたちは、また全国の大学は「そのつもりで対応」していると思う。しかし、それにしても大学を覆う知的な弛緩・沈滞は目にあまるものだ。しかも、それは大学だけのことではない。現代日本社会全体がほんとうの意味での知的向上心、倫理的緊張感を失っている。大学はその反映にすぎないといえるのではないか。

3. さまざまなレッテルを再検討する 学生たちは一見、けっこう楽しそうにやっている。いわゆるレジャーランドとしての大学を屈托なくエンジョイしているかのようにみえる。じつは、そこにかれらの不幸があり、ぼくたちオトナどもの責任があると思うのだ。現代の学生や若者たちに対して、数多くの漫罵がマスコミを通じて浴びせられてきた。「大学レジャーランド論」もそのひとつだし、もっとも古典的なものとして「女子学生亡国論」（暉峻康隆）、「新人類」（筑紫哲也）、「活字ばなれ」、「無気力・無関心・無感動」などもあった。なるほど、と笑いながら、しかし無責任な誇張と感じたひとも少なくあるまい。教育の現場にいる者とすれば、仮りに当たっている部分があっても、むしろ「何が彼らをそうさせたか」を考えずにはいられない。すでに手

アカにまみれて忘れ去られたレッテルが多いが、そうした神話を現在の目からあらためて検討しなければならぬ。

たとえば「レジャーランド論」について、ぼくは鈴木勲文部審議官や木田宏国立教育研究所長（いずれも当時）らと話しあったことがある（『文部時報』昭和55年3月号所収）。そのとき指摘したのは次のような点だった。

「将来の大学は、良い意味でのレジャーランドになっていいんじゃないか。大量生産・大量消費の現在、あらゆるものを生産に結びつけ、それを当然と考える社会にブレーキをかける必要がある。その意味では、大学に代表される教育の場は最も非生産的な場所だ。しかも人間の最も美しく、極めて人間的な部分で、将来もっと大きな場所を占めるにちがいない。大学はレジャーランドとあざけられることはむしろ肯定して、現代の常識になっている価値——つまり生産とか就職などに対抗するものとして教育や学問をもっと自己主張してゆく必要がある」。

「仮りに若者が教育という場にいる時間がもっと長くなり、浪人がもっと増え、中高年がまた教育の場に戻って勉強し直すという非生産的人口がふえればあい、それは老年の失業を救うことになる。つまり高年層にもっと長く働いてもらうために若年層が犠牲になる、それも楽しく勉強することによって、というパタンは、一種の理想社会じゃないか」。

今から17年も前の、高度成長期の発言だが、現在でもぼくの考えに変わりはない。若者の四割に達する大学生がいっせいに学園を捨て、労働市場に参入したらどうなるか。大学を出たばかりで定職のない若者にすぐ失業手当を支給する英国やフランスに比べ、そういう巨額の財政支出を日本は免れている。それどころか年百万円もの授業料を納めさせている。親の負担において労働市場を安定させている妙案と考えれば、政府が大学に助成金を出し、大学がレジャーランド化し、学生が「モラトリアム人間」になるくらいは、社会が甘受せねばならぬ代価かもしれない……。

もちろん半分は冗談だったが、半分は本気だった。こういう形で国家に貢献している大学生と親たちを「なぜ勉強しないか」と非難するのは酷といってもいい。まして、前述のように、大学で勇んで勉強するだけの準備教育を施していないとすれば、天にツバするようなものかもしれないのだ。

そして、「女子学生亡国論」。もともと一種の風刺として語られたように記憶するが、もしマトモに受けとるならば、こちらは完全に逆転し、「興国論」というべき状況にある。多くの大学で、まじめによく勉強するのは女子学生であり、優等賞を受けて卒業してゆくのも、就職の筆記試験で上位を独占するのも圧倒的に彼女たちだ。それは男子学生の「無気力・無関心……」の裏返しでもあるが、しかし大学の授業や成績査定がノート暗記型で“まじめ”な女性むきであることの反映でもある。そういう昔ながらの知識偏重型の勉強を外れて、奇想天外な、スケールの大きな卒業論文となれば、こちらは優秀な男子学生に期待するほうが早い。けれど女子学生の中から規模雄大なアイデアが生まれる例が、しだいにふえてきたのも事実だ。したがって問題は、かなりの数の男子学生の「やる気のなさ」にある。それはただ授業内容だけの責任だろうか。

考えてみれば、このような思考形式における男性型と女性型は今にはじまったことではない。むしろ、ほとんど万世一系の生理的な性差のようにみえる。ただ男性のいい加減さが、女性不在だった戦前の大学では目立たなかったり、男らしい豪快さとして黙認あるいは自賛されたフシもなくはない。だが、さらに考えてみれば、この背景にはいま流行の「父権の喪失」、つまり男性における家長意識の崩壊がありそうだ。日本社会を支えてきた家族制度は戦後50年余にして、いよいよ動揺をふかめている。きたるべき家長としての責任意識が、若い男性に育たない。自分が

楽しく生きること、そのためによきパートナーとしての異性を発見すること。それが目標となっている現状では、かつての「男らしさ」など求めることはむづかしい。それが大学における男子学生の変化を生んでいる一因のように映る。だが、それだけでもあるまい。

4. 「出口」の投げる影 どの大学であれ、いま大切なのは「入口」「中身」「出口」である。入口——つまり入学試験で優秀な志願者をたくさん集めること。中身——学生の意欲をそそのかすカリキュラムを組み、楽しくて熱気あふれる授業を提供すること。出口——いわゆる有名企業に卒業生をどっと送りこむこと。以上三点、たがいに深くからみ合っているが、幼児まで巻きこむ受験戦争の終点は、いうまでもなく「出口」であり、「いい会社」へ就職できるかどうか大学が大学のランクを決定しているのが現実だ。その観点でいえば、戦後生まれの「駅弁大学」、後発の発展途上大学は決定的に不利で、「入口」で数多くの高校生を集められない。おそらく日本の過半数の大学はこれに苦しんでいる。いかに「中身」をよくしようと、「出口」「入口」の制約をなかなか超えることができない。さきに述べた多くの男子学生の無力感はこの現実によく影響されている。もともと就職差別になれっ子の女子学生がそれでも何とか食いこもうとするのに比べ、病根はずっと深い。その劣等感や家長意識が育たぬことにもつながってゆく。

けれども、事態は救いたいものなのだろうか。ほくたちの目の前に展開しているのは「一流官庁」や「いい会社」の腐敗や行きづまりである。こうした就職先は、多くの学生にとって高嶺の花であり、受験する気さえ起きぬほどの偶像だった。その動揺は、学生たちに就職先を考え直させ、ゆえない劣等感をいやし、自尊心をとりもどすチャンスにならないだろうか。

うちの学生には、たとえば青年海外協力隊や国際協力事業団を志す者が少なからずいる。それは大蔵省や外務省が難関だから、とは思いたくない。中学、高校、大学と必ずしもエリートとしてでなく、健康な中堅の若者として育ってきたなかで、健全な価値観を身につけ、それに合致する就職先を選ぼうとしたのだ、と考えたいのだ。仮りに志をとげ、発展途上国の人びととともに生きる道がひらけたとしたら、かれらほどこの仕事にふさわしい者はいないかもしれない。ばかげたエリート意識などはカケラほども持たず、それどころかエリートたちに傷つけられた経験を味わった人間こそ、同じような境遇になやむ異国の、もっともよい理解者、友人となれるだろうからである。

5. 石もて若者を打つ? もちろん、このように自覚的に生きてゆく道を見つけられる者だけではない。やはり多くの学生は就職が迫っても、将来にかんしては五里霧中といっている。この状態を評して、慶應義塾大学の小此木啓吾教授とともに「モラトリアム人間」と名づけることは、もちろん可能だ。しかし似たようなモラトリアム状態でも、たとえば英国のオクス・ブリッジの学生たちが「あまりに大学が心地よいために企業社会に入りたがらない。それがビジネス沈滞の英国病の一因にもなった」(森島通夫・ロンドン大学名誉教授)のとは、まるで違う。日本のばあいはやはり、一つにはエリート社会から疎外されているための無気力、その一方では定職を持たなくても何とか暮らせるアルバイトやフリーターの存在、がある。「戦後ドイツの教育」にかんして、なかなかすぐれた論文を書いた男子学生が第一志望の業界への就職に失敗したあと、一年あまり就職浪人をつづけていた。こちらが心配して尋ねても、フリーターで、企業の初任給くらい(ボーナスを除く)はかせげるし、雨の日や気がのらぬ時は自由に休める境遇に安住しかかっていた。やがて故郷で定職についたが、就職という概念が昔とはかなり変わってしまったのも、

いまの大学の教職員たちを戸惑わせずにはおかない。

だが、もっと重要なのは、ほくたちの社会が今、若者たちの志を燃えあがらせるような職業をほとんど用意していない点である。ただ有名企業に汚職が続出している、という現象の話ではない。まさか「末は博士か大臣か」といった明治時代の立身出世コースや、アメリカン・ドリームに似た成功への、はっきりした野心の存在をうらやむ者はいないだろう。しかし、それに代って若者に「青雲の志」のありかを、ほくたちが提示できないのもまた事実なのだ。「近ごろの若い者」の無気力をとがめるのは簡単だが、近ごろのオトナたちの惨状をみれば、かれらの精神状況がほくたちのそれを鏡のように映していることはいうまでもないことだ。だれか「石もて彼らを打つ」ことができるだろうか。このことを、オトナたちがやらかした日中戦争、太平洋戦争によって旧制中学・高校時代をめちゃめちゃにされた人間のひとりとして、ほくは記しているのである。

6. 学園の「不易」と「流行」 以前、「活字ばなれの神話」という題の論文を書いたことがあった（朝日新聞、82年10月10日朝刊）。そこで、ほくが引用したのは東大経済学部・大内力教授の退官にあたっての発言だった。学問の将来を憂い、教え子の学力低下を嘆いて、教授はこう述べた。「参考文献をあげても一年かかって二、三冊読めばよいほうだ。小学校から大学まで、テレビと漫画、あとは受験参考書だけというのでは、ろくな人間はできません」。そして「東大の入試も読み書きソロバンでよい」と。あれから15年たっても、事態は一向に改善されないが、学生たちが本や新聞を判読できないほどに悪化していないことをよろこぶべきかもしれない。

だが当時も指摘したことだが、かつて文化の泉は活字だけだった。映像や音響、電波が加わった今、活字のシェアが低下するのは当然のことだ。一方、ほくは美空ひばりと同様にオタマジャクシさえ読めず、新しいメディアを理解できない。頭の中には「士農工商」に似た文化の階級制がある。サムライはもちろん書物で、音や映像はこれに土下座して奉仕すべき百姓町人、という考えがぬけない。学生たちとカラオケに行くと、つくづく思い知らされるのは、かれらのほとんど肉体的というべき音楽感覚だ。そのビートのきいた歌声をきいていると、ほくの文化領域のせまさを再認識し、よほど魅力的でなければ活字は二の次にされるにちがいないと思う。歌いながら猛烈に足を使ったためにネンザしてしまい、翌日は松葉ヅエについて教室に現われた男もいたのである。

こういう「新人類」的な実例を探せば、ほとんど無数にあるだろう。だが物事には必ず「不易」と「流行」と二つの部分がある。学生たちもちろん例外ではない。

はじめに書いたように、ほくは数年来バレーボール部の顧問をやってきた。かれらは週に3回、放課後に体育館で夜8時まで練習する。シーズンに入ると、日曜日は県内外の大学とリーグ戦やトーナメントを戦う。会場は回りもちだから、千葉や埼玉で午前9時試合開始のときは大変だ。選手たちはそれでも格好よくゲームを楽しめるが、女子マネジャーは午前4時に自分のアパートで起床し、ごはんを炊き、ニワトリの唐揚げをつくり、フロシキに包んで会場へ来る。試合前の練習を手伝い、大声で応援し、スコアブックをつけ、昼食の世話もかいがいしくやってくれる。なのに肝心の男子選手はガラシなく負けたり、丹精こめた弁当を「ごちそうさん」とも言わずに平げて、ごろりと横になったりする。傍で見ているほくは、女子学生のあまりのいじらしさに、「おい、テレくさいんだろうが、ありがとくらいは言え」と選手たちを叱るのだが、彼女たちはまちがいに部活動に生きがいを感じている。ああ、なんといい娘たちだろう、とほくは時に老眼が熱くなるのだ。

勉強のほうだって、そういう「不易」の光景がちゃんと残っている。いちばん良いのが卒業論文づくりだ。就職活動と同時並行で落ち着かないのだが、けんめいに考えてテーマを出し、ぼくの助言にしたがってE U代表部や国会図書館を訪ね、資料を集めて下書きにかかる。ふつうの授業や試験のとき、いかにも頼りない学生が、にわかにヤル気を出し、じっさいにとってもオトナっぽい文体で、オトナっぽい論文を書きあげてくるのだ。

「大丈夫かな、とじつは心配していたんだが、いいじゃないか。見直したぜ」と、うれしさのあまり、大いにほめてしまう。すると「やっと勉強のおもしろさが分かりかけてきました」と向うもううれしそうにいう。「そうだろ。先生の話をはんやり聞いているのと、自分で何かを創るのはまるで違う。それに気がついたら、立派に大学生になったということだ。ただ、それが分かったときには、もう卒業なんだな。せめて二年か三年のときに気づいてくれたら、と思うよ」。「ほんとにそうでした」。受け身の授業、それもあまり興味のわかないテーマ、そして暗記。それでは学生たちも沸き立たない。ゼロから自分で50枚以上の論文を仕上げる苦勞と、そのあとのよろこび。それは古今東西かわらぬ勉強のたのしみだろう。まるでチャランポランな異国人にみえた学生たちが、突然、血を分けた仲間のように思えてくる。そういう瞬間はちゃんと大学に残っているのだ。望みなきにあらず、絶望や失望はまだ早い。

(国際学部教授)